



Title	教育の世紀社同人の生命主義思想：赤井米吉，志垣寛，野村芳兵衛の場合
Author(s)	伊東, 順真
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 142, 85-107
Issue Date	2023-06-26
DOI	10.14943/b.edu.142.85
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/90077">http://hdl.handle.net/2115/90077</a>
Type	bulletin (article)
File Information	09-1882-1669-142.pdf



[Instructions for use](#)

# 教育の世紀社同人の生命主義思想

—赤井米吉, 志垣寛, 野村芳兵衛の場合—

伊 東 順 真\*

## 【目次】

1. 課題と先行研究
2. 赤井米吉
  - (1) 生命主義宗教教育思想
  - (2) 転向
  - (3) 生命世界論
3. 志垣寛
  - (1) 宇宙論的生命主義論
  - (2) 生命主義世界実現のための教育
4. 野村芳兵衛
  - (1) 「無量寿」への生命信順
  - (2) 「国体」への生命信順
5. 結語—本研究の総括と達成

【キーワード】 赤井米吉, 志垣寛, 野村芳兵衛, 生命主義, 新教育運動, 生命国家

## 1. 課題と先行研究

下中弥三郎(1878-1961)は啓明会や教育の世紀社などで活躍した大正期教育運動の旗手であったが、昭和初期には一転して全体主義者へと変節を遂げた。筆者は前稿においてその生命言説を検討した<sup>1</sup>。下中は大正期、アナーキストとして子どもの「生命」の自由な成長を尊重する教育論を説いていたが、1932年頃を境として生命国家論者へと転身し、支配を正当化し、総力戦国家体制強化の教育を高唱するようになった。同じ「生命」という言辭が用いられながら、「大正期の教育運動が必要としたもっとも重要な人物」<sup>2</sup>と評価された下中は、全体主義者へと転身したのである。

先行研究が示す通り大正期の教育運動において「生命」が鍵概念となっていたことは下中に限ったことではない。加えて、大正期に活躍した教育論者が、アジア・太平洋戦争期に国家主義的、全体主義的な教育論を積極的に唱えるに至ったこともまた事実である。下中において生命主義こそが彼のファシズム教育論の本質であったことを踏まえると、大正期教育運動と国家総力戦体制下での教育との接続関係を問い、その内在的な説明を試みようとする場合、生命思想に焦点を当て、それを一貫したものとして分析することは有効であることが見込まれよう。こうした課題究明の足掛かりとして、まずは下中と同時代の個々の教育論者の生命思想がいかなるものであったかを解明することが必要である。生命思想に彩られた大正期教育運動にあって、各教育家における生命思想そのもの、あるいは彼らの大正期から昭和

---

\* 北海道大学大学院教育学院博士後期課程  
DOI: 10.14943/b.edu.142.85

ファシズム期にかけての思想的軌跡は、下中と同様のものではあったのだろうか。

大正期の下中弥三郎の教育運動を語るにつけ、下中が「一切をさゝげる覺悟である」<sup>3</sup>と息巻いた教育の世紀社の活動は外せない。周知のように教育の世紀社は下中に加え、野口援太郎、為藤五郎、志垣寛を同人とし、社友に赤井米吉、小原国芳らを迎えて結成され、池袋・児童の村小学校では平田のぶ、野村芳兵衛らが教鞭を執った、アナーキズムの傾向を含んだ教育団体である<sup>4</sup>。「大正期新教育運動の頂点」<sup>5</sup>とも評される教育の世紀社こそはその「宣言」や「『児童の村』プラン」に見られるように教育理想の象徴として「生命」を掲げていた<sup>6</sup>。ここに挙げた教育の世紀社を代表する教育家にあっても生命思想は顕著であることが予想されよう。

本稿では、教育の世紀社に中心的に携わった赤井米吉（1887-1974）、志垣寛（1889-1965）、野村芳兵衛（1896-1986）を取り上げ、検討することとしたい。赤井、志垣、野村は大正期、後述する先行研究がすでに明示あるいは示唆するように、生命思想の色濃い教育論を説いていた。教育論の第一義に「生命」を置いていたのである。具体的には、赤井は「教育的創造や、それは無始の昔に起つて無終の時にまで働いて止まぬ生命の活動である」<sup>7</sup>と論じ、志垣は「わが信ずる教育は生命と終始し、生命を以てその第一原理とする」<sup>8</sup>と宣言し、野村も教育を「生命に信順すること」と定義し、「教育の目的も、生命信順であり、教育の方法も生命信順である」と断言していた<sup>9</sup>。とはいえ、「生命」を教育の原理としたことは下中との共通点でもあり、むしろ下中は大正期から一貫した生命主義者として、昭和戦前・戦中期には生命国家論という生命思想に導かれる形でファシズム教育論を高唱していたことが明らかとなっている。では、新教育期に生命思想に立脚して個人主義・自由主義的教育論を唱えていた赤井、志垣、野村は、昭和ファシズム期にはいかなる主張を展開していたのだろうか。大正期の教育運動を支えた「生命」思想に特に着目し、検討を進めていきたい。

「生命」思想に関する先行研究としては、教育分野におけるいくらかの研究蓄積があるが、その前にまずは鈴木貞美による生命主義研究をおさえておきたい。

鈴木貞美は近代日本に「生命」思想が氾濫していたことを指摘し、その思想潮流を「生命主義」として別括した。鈴木は生命主義を「神でも物質（その運動法則）でもなく、「生命」なる観念を第一義におく、あるいは神や物質と等しい位置に「生命」というものを想定する「生命中心主義」（Life-centrism）もしくは「生命主義」（vitalism）という思潮」<sup>10</sup>と定式化したわけだが、大正期から昭和ファシズム期までを通底する概念として「生命」を見出し、両時期を通底する枠組みとして「生命主義」を提示した点にその特徴がある。西洋由来のスピリチュアリズムやロマンティシズム、進化論や生の哲学などを契機とした生命主義は、高山樗牛や北村透谷、岡倉天心などに先駆的に見られ、大杉栄を筆頭とするアナーキズム運動や西田幾多郎を始めとする学術界隈にまで浸透した顕著な思想であったと鈴木は述べている。加えて昭和に入ると、生命主義は岡本かの子や寛克彦らの主張に見られるように普遍主義から日本主義への傾斜を深め、昭和10年前後にはアジア主義的な傾向を帯び、「アジアへの侵略戦争に、まるで観念的な意味を与え、思想的、心情的に後押し」<sup>11</sup>したと結論づけている。つまり生命主義こそは日本ファシズムの哲学観念的な表現形式であったのである。

教育分野においては、早くも磯田一雄と中内敏夫が大正新教育の「生命」主義的傾向を指摘こそしたが、示唆に留まるものであった<sup>12</sup>。しかし鈴木貞美による生命主義研究ののち、生命思想を正面に据えた研究がいくつか発表される。志垣寛を対象とした足立淳のもの、「生

命の躍動」をキーワードとして大正新教育を再検討した橋本美保及び田中智志らのもの、野村芳兵衛を扱った富澤美千子のもの、木下竹次に着目した川上英明のものである<sup>13</sup>。これらは従来教育方法にばかり焦点が当てられてきた大正期の教育史研究に一石を投じる、意義あるものと言える。足立と橋本らの研究は鈴木生命主義研究とは射程を異にしており、検討時期が大正期に限定されている点は惜まれるものの、近代日本の教育学分野における生命思想研究はこのように蓄積されつつある。

次に本稿が具体的に扱う赤井米吉、志垣寛、野村芳兵衛について見ていこう。赤井を検討した先行研究には、明星学園のカリキュラムや彼の転向について明らかにした中野光のもの、彼の郷土教育実践を分析した坂井俊樹のもの、彼のドルトン・プラン摂取やその転向について再検討し、また西田幾多郎との影響関係を論じた足立淳のもの、1920年代の彼の芸術思想、宗教思想を考察した李舜志のものがある<sup>14</sup>。このうち足立と李は、大正期の赤井が自らを超える超越存在「神」（「生命」）を想定していたことを指摘しており、参考になる。また中野と足立は赤井の「転向」に着目している。中野は1936年6月の世界新教育会議直後に赤井の直接の転向の契機があり、1940年以降に完全に果たされたと述べた一方、足立は1936年2月時点ですでに転向は遂げられていたと中野を批判しながら、その時期や論理的な過程に関して今後更なる検討が必要であると問題提起している<sup>15</sup>。

志垣に関しては、生活綴方教育との関係性や彼の「生命」的神秘思想を指摘した中内敏夫、「教育の自由」という観点からその教育論を検討した伊津野朋弘、芸術教育論者と捉えて分析した上野浩道、教育の世紀社での歴史的役割と意義を評価した中野光、彼の教育論の全体構造理解の基礎作業としてその生命思想や新教育批判を取り上げた足立淳によって研究が進められてきた<sup>16</sup>。しかしこれらはいずれも志垣の大正期のみを検討した研究であり、彼の昭和ファシズム期の思想分析はこれまでほとんどなされていないのが現状である。本稿の課題からすれば足立による生命思想研究は見ておく必要があるだろう。足立は志垣の「生命」を正面に据え、ベルクソン哲学との照応関係を論じるなどしながら、志垣における「生命」を「宇宙」を満たし「刻々に流転して止ま」ない潜在的で神秘的な「伸びんとする力」<sup>17</sup>と結論づけたが、先に記したように論考自体は「基礎的研究」と位置づけられており、志垣の思想としての結論が示されたというよりは鍵となる言説がいくつも提示されたものである。

野村の教育思想については、中内敏夫、今井康雄、浅井幸子、木下慎、富澤美千子によって研究がなされてきた<sup>18</sup>。研究史においてとりわけ議論されてきたのは1932年頃の野村の思想変容である。これについて中内は「神学」から「人間学」へ転回したと述べ、今井は教育論における「鼓舞する」働きと「作る」働きの両立が崩れて後者偏重になったと説き、浅井は野村の教育思想の挫折であると結論づけ、木下は「他者との共生」から「食って生きる」ことに目的が変化したと分析した。そのようななか、富澤は野村の教育思想の核心として彼の大正期の教育理念である「生命信順」を抽出し、大正期から昭和期、さらには戦後にかけて彼の教育論は「生命信順」の教育が生成・発展したのものであるとその一貫性を論じており、注目に値する。富澤は戦後にまで視野を広げ、加えて野村の思想の根幹である親鸞思想をも俎上に載せており、大きな達成と言えるが、野村の昭和期の生命言説の分析・記述は他と比べるとやや薄くなっている。

以上の先行研究を承け、本稿では下中弥三郎とともに活動した赤井米吉、志垣寛、野村芳兵衛を取り上げ、彼らの生命言説を検討する。その際、大正新教育期から昭和戦前・戦中期

までを射程に入れ、彼らの大正期の生命思想とその思想的背景を明らかにし、加えてこれまでほとんど正面から取り上げられてこなかった昭和期の言説を分析・考察する。その上で前稿で検討した下中弥三郎の生命主義思想と比較検討しながら、大正期から昭和期にかけての彼らの主張、そして彼らにおける「生命」概念について分析し、説明することを試みる。

## 2. 赤井米吉

### (1) 生命主義宗教教育思想

赤井米吉は大正新教育を代表する教育実践家として、また郷土教育運動の指導者として知られている。金沢に生まれた赤井は15歳で洗礼を受け、石川師範学校を経て広島高等師範学校に進学し、卒業後はいくつかの学校に奉職したのち、1922年に小原国芳、沢柳政太郎らのいた私立成城小学校に赴任する。このときダルトン・プランを考案したH・パーカーの来日に際して通訳を務め、同プランを日本に紹介している。1924年には成城小学校を去って自ら明星学園を設立し、教育現場と向き合いながら他方『教育の世紀』誌に頻繁に寄稿するなど執筆活動にも積極的であった。しかし、1930年代後半からは徐々に国家主義的な性格を強めて戦争に積極的に協力し、そのかどで戦後は公職追放を受けることとなる<sup>19</sup>。

まずは赤井の教育観を確認しておこう。「教育的創造」(1920年)には以下のようにある。「教育とは神が児童を通じて自らを體現する過程であると云ふことが出来る。尊い裁教育的創造や、それは無始の昔に起つて無終の時にまで働いて止まぬ生命の活動である」<sup>20</sup>。ここでの「神」は「大宇宙の根本なる力」<sup>21</sup>や「普遍の實在」、また「宇宙、人生に瀾漫せる眞、善、美」<sup>22</sup>と表現される、宇宙の実在としての普遍的超越存在であり、引用中の「生命」もそれを指している。また「宗教教育」(1924年)では教育はこのように定義される。「教育は人間をして、彼自身に関し、また彼自身の内部を、明瞭に理解せしめ、進んで自然と融合し、神と統一するように指導し、案内しなくてはならぬ」<sup>23</sup>。赤井にとっての教育の本質は、「神」(=「生命」)を被教育者に獲得せしむる宗教教育だったわけである。赤井における「生命」は、下中弥三郎が強いアナーキズム的傾向のゆえに現実世界に視野を限定し、超越世界を想定せずに捉えようとした「生命」とは異なるものであったと言える。

こうした赤井の思想は何に由来するのであろうか。彼の思想を読み解くにあたり、足立が指摘した本間俊平(1873-1948)とH・パーカー(1887-1973)との影響関係を再度確認しておきたい<sup>24</sup>。本間俊平は山口県秋吉台で大理石採掘を通じた教育実践を30年間行ったキリスト者であり、赤井は学生時代に秋吉台で出会っている<sup>25</sup>。本間は1923年に教育を「人間の衷に藏れある能力を發揮せしめ、其心意をして宇宙の大靈に接吻せしめ」<sup>26</sup>と定義し、そのためにもまず教育者こそが「宇宙の大靈に同化」すべきと説いている<sup>27</sup>。本間における教育の極致はR・W・エマソンを彷彿とさせる「宇宙の大靈」との合致だったわけである。そのような本間に赤井は魂を打ち砕かれるほど強い影響を受けたのであった<sup>28</sup>。その衝撃と恩義は赤井に本間の人物評伝の出版まで考えさせ、実際に本間没後の評伝出版の際には追悼と懐古の文章を認めている<sup>29</sup>。赤井が教育方法として「勤労」を重視したことも本間からの影響が大きい<sup>30</sup>。パーカーとの接点はドルトン・プラン撰取の文脈であるが、周知のように赤井はパーカー本人やドルトン・プランそのものに入れ込んだのではない。同プランの「自由」の原理のうちにエマソンの影響を認め、自らの宗教教育思想に適用と期待し、自由

教育の方策として摂取したのである<sup>31</sup>。

さて、赤井と本間およびパーカーストとの影響関係を見たとき、その思想的交錯の背景にエマソンの思想の存在が浮かぶであろう。エマソンこそは赤井が「米國が生める最大の哲人」<sup>32</sup>と称賛した思想家である。R・W・エマソン(1803-1882)はハーバード大大学院を出たのち牧師となるが、伝統的・形式的な教義、宗派や宗閥ありきの教会制度に疑問を抱いて辞し、個人の信仰を重視して「大靈」との合一を極致とする哲学を説いていた<sup>33</sup>。これは神や精神、物質ではない超越的な観念(「超越的生命」)を原理とする思想であり、生命主義思想(Life-centrism)と言いうるだろう<sup>34</sup>。エマソンの超越論哲学が先にみた赤井の宗教思想と酷似していることは明らかであり、赤井がこれを宗教分野に引きつけて摂取したことはもはや論を俟たない。

そしてもう一人、赤井の生命思想理解の一助とすべく、彼が高く評価した人物について検討しておきたい。植物学者L・バーバンク(1849-1926)である。赤井は1926年、バーバンクについて、その思想は新教育そのものであり、人間教育の理想と方法を完全に発見していると称賛しており<sup>35</sup>、また明星学園での実践にも強く影響していたと戦後にも綴っている<sup>36</sup>。赤井が評価したのはバーバンクの植物研究の基底となった「生命」観である。バーバンクは一切の生命の本質が宇宙を構成する無限なる生命そのものにあると見定め、植物にも「生命の躍動」を認め、生命そのものの特徴を進歩、発達、変化、飛躍に置いていた。赤井はこうした生命論から、一切を生命とし、その発展を教育の効力とみなす世界観を受け取り、習性と遺伝を否定して教育の万能を謳う教育観を読み取り、評価したのである<sup>37</sup>。実際、赤井は「生命」を慣習や伝統と無縁なものに見做している。『体験の教育』(1926年)では、嬰兒は母親の一部ではなく神の直接の新たなる造化であり、血縁地縁の共同体は経験によって獲得されると論じている<sup>38</sup>。赤井が積極的に評価したバーバンクの生命観もまた、宇宙論的な超越生命を根底に置いているものと言える。

## (2) 転向

1920年代に隆盛を誇った大正期教育運動は自由主義、児童中心主義を掲げた実践運動であったが、20年代後半から相次いだ恐慌による全国的な窮乏の具体的解決策とはなりえなかったため、その一部は現実生活をより直視して社会改良を目指した郷土教育運動に活路を求めた<sup>39</sup>。そうした流れの代表的な組織に郷土教育連盟があるが、赤井はここに属し、1930年代前半は明星学園を中心として郷土教育実践に努めていた。「いかなる郷土を建設すべきであるか、それはどうしても農村といふ事になつてくる。農村的郷土、農村社會といふものが吾等の描いてある郷土である。今日は田舎と都會の對立である。…(中略)…農村が常に都市に搾取されて、今日の惱み多き時代を作りつゝあるから之を救ふ意味に於て吾々は農本主義の社會建設—農本中心の郷土建設に努力しなければならぬ」<sup>40</sup>。赤井は都會的資本主義文明が農村を搾取していると捉え、農村的郷土の建設によってそれを克服することを考えたのである。

赤井の「転向」は中野光や足立淳によって、思想としては自由主義、個人主義との訣別であり、時期としては例えば下中弥三郎にみられるような五・一五事件直後のそれに比べると比較的遅い1936年前後であると考えられてきた<sup>41</sup>。赤井は1930年代前半、郷土教育を「郷土生活の再認識と再建設の教育」<sup>42</sup>と把握し、あくまで生活そのものの指導に限定しており<sup>43</sup>、ゆえ

に郷土愛と国家愛とは無媒介には接合しないと論じていた<sup>44</sup>。この時期の赤井は、中野が指摘した通り、権力の意図とは距離を置く「ナショナルな性格はすこぶる希薄」な自由主義者たりえていたわけだが<sup>45</sup>、その背景には赤井の時代認識、すなわち当時の社会矛盾や生活の疲弊は資本主義の行き詰まりに因るものであり、それは集団的労働及び集団的経済を軸とする「組合主義、協同主義社会」への労使協調的改造によって克服=止揚されるという認識があった<sup>46</sup>。

とはいえ、中野は「少なくともかれ [=赤井：引用者注] が郷土教育運動を推進していた時期では、その理論が国家主義理論と結びつくことは予想されなかった」<sup>47</sup>と分析したものの、赤井の転向の萌芽はすでに1932年、郷土愛と国家愛を論じたなかに見て取れる。「現在の急務はこの國家を我等の國家たらしめること、その方向線に於て互にこの郷土を我等の郷土たらしめること、その生活統一體を建設することである。…(中略)…それは新し國家建設を豫想しなければ不可能なことである。かくて郷土愛、國家愛は同時に發達する一つの愛の二面で、何れを前後と斷定することも出来ない」<sup>48</sup>と、彼は社会認識においては郷土愛と国家愛の連続性を否定するものの、内面では両者の統一を画策するわけである。その契機となるのが「新し國家建設」つまり資本主義社会の行き詰まりを打開する協同社会的な新國家構想である。郷土教育論においてそれは幾度も言及されるが、規範や原則が提示されるに留まっている<sup>49</sup>。

新しい国家秩序を模索するなか、1935年には個人主義、自由主義への懐疑、そして民族主義、集団主義イデオロギーへの傾斜を見せた赤井は<sup>50</sup>、旧知の仲である下中弥三郎が鼓吹していた国家論に触発を受けることとなる。その国家論とは、天皇を中心とする生命国家論である。「日本は天皇國である。日本人は皇祖天照大神の血脈を受けて生長し發達したる民族である。その民族が一家の如く生活せる國である。天皇は、日本國なる一大家族の父として君臨せられる。日本國家は萬世一系の天皇を中心として生活する家族國家である。天皇を中心として國民が強固に結ばれた生命國家である」<sup>51</sup>。日本について民族の父たる天皇を中心とする一つの生命体と主張する生命国家論は西洋的な法治主義・議会主義を超克しうる国家体系と論じられており、この国家論に赤井もまた近代西洋的・合理的な文明を克服する活路を見出したのである。赤井は下中から生命国家観=生命世界論を摂取し、1938年頃から自説として展開するに至る<sup>52</sup>。

### (3) 生命世界論

赤井の生命世界論は1938年から1941年に集中して表れている。赤井は資本主義的、個人主義的、機械主義的な旧世界観は、八紘一字を理念とする日本的な皇国世界観によって止揚されると見定めたのだが、このとき「世界が一つの生命體」<sup>53</sup>であり、「新世界観はその脱皮した新しい生命體の映像である」<sup>54</sup>と、生命世界観こそが新しい世界観であると捉えていた。赤井にあってかつて個人と宇宙とを媒介する活動的な超越存在であった「生命」が「世界」として具体化したわけである。同様に「生命」は「民族」や「國家」にも当てはめられるが、世界の实在である「生命」の顕現として國家を認識する世界観は赤井の日中戦争理解に大きな影を落とすこととなる、すなわち開戦の意義が不明確である点や政府の不拡大方針に軍が背いた点は脇に置き、「事實が思惟を超越すること」、「豫め思惟を以て決定し得ない創造」として日中戦争を評価するのである<sup>55</sup>。こうして赤井は「世界の新秩序建設」を標榜する八紘一字

を掲げてのアジア諸国への侵出を「民族生命、世界生命の躍動そのものに於て刻々に實現し、形成して行く」と正当化するに至る<sup>56</sup>。

赤井の生命世界論についてももう少し具体的に検討してみよう。彼は1938年、生命世界論に立脚した見地から以下のように力説している。

皇國の爲に我々は喜んで一身を獻げる。これは一生命體、一体同心であるからである。手や足が頭首の爲に働き、自らを犠牲にすることを厭はないやうなものである。東亞が一つの生命體、共同體たらんとするには、又同様に犠牲がなければならぬ。聖戰は多くの若き、純潔なる血を流した。同様に文化戦も多くの血を流した。同様に文化戦も多くの血がなければ勝ちを得られぬ。…（中略）…新しき東亞の文化を熱望するが故である。八紘一字の傳統に止むに止まれぬが故である。さらばこの文化、教育の擔當者である教育者もこの爲に生命を獻げねばならぬである。（傍点筆者、以下同様）<sup>57</sup>

「生命」とされた「皇国」や「東亞」の生存のために、あるいは「躍動」と表現された「聖戦」の対外侵出の成果最大化のために、生命的皇国のうち枢要とは認められなかった「手や足」は「犠牲」となることが肯定され、剩え必然視までされている。個人は「細胞」<sup>58</sup>として「生命主義國家乃至協同體」<sup>59</sup>を支えるのである。赤井の生命主義國家論は「自由」や「個人」の尊重は皆無に等しい、國家生命という全体に主眼が置かれた國家主義論、「全体主義」<sup>60</sup>論に他ならないことが理解されよう。

こうした生命世界論は、大正期の赤井の根底にあった宗教思想とも矛盾はせず、むしろ適合し得たものであった。1930年には将来の宗教について論じているが、そこには大枠としては大正期からの連続性が見てとれる。「神」は「人の裡にあり、宇宙の根底にあり、一切の物の裡にありこれを統一し、これを發展せしめ、これを成長せしめる一つの力、精神」<sup>61</sup>であると説明される。そして死後の世界はあえて否定され、「この社會に於ける永遠の生命を信じ、これを己が生命と信じなければならぬ」<sup>62</sup>と、人間の生命は現實世界に留まるものであると示される。下中の生命國家論には宗教的側面があり、そこで宗教の本質は「永遠の生命を得る」こと、「有限の生命を無限に變ずる」ことと規定されるわけだが<sup>63</sup>、下中の生命國家論は宗教的観点からも、赤井の求めた思想に適合しえたと考えられる。たしかに赤井は洗礼を受け、キリスト教思想からの影響も受けていたが、あくまで彼の宗教論の本質は超越存在（「神」・「生命」）との合一であり、キリスト教信者ではなかった。現に1932年には、社會の変化に応じて宗教も変化すべきであり、キリスト教を含め、「既成宗教のイデオロギーは過去の社會思想」<sup>64</sup>であると其の失墜を論じ、新社會には新宗教が必要であることを訴えている<sup>65</sup>。

旧世界觀を止揚する新秩序として生命國家論に逢着した赤井にとって、教育目的は生命世界の建設となる。「新たなる世界、新たなる國家、その創造が教育の狙ふところである」<sup>66</sup>。「新東亞の建設と云ふこと自體が教育そのものである。結局興亞の教育が凡てである」<sup>67</sup>。当然、学校教育も「高度國防國家の戰士」<sup>68</sup>の養成が掲げられて上述の目的達成を支える手段・方法に位置づけられ、また家庭教育にも同様の役割が与えられている。1941年の国民學校令公布に際しては「国民學校と母親心得」と銘打ち、従来の学校教育は立身出世を旨とする利己主義的なものであったとその欠陥が総括され、このように続けられる。「大君の爲、國の爲、隣人の爲と、己が身を捨て、己が事を後にして盡す人にすることが本旨となります。子



供は家の子供でも、学校の子供でもありません。全く大君の赤子、國の子供であります。…(中略)…個人として親の子として教育するのではなく、大君のものとして教育することで」<sup>69</sup>。子どもを國家に組み込んだ観点から、生命世界建設を進めるべく、皇國全體のための自己犠牲を厭わない子どもの教育を訴えるのである。昭和期の赤井の教育論は下中に由来する生命國家論から敷衍されたものであり、その点下中の昭和期の教育論と同様の構造を有つといえる。

### 3. 志垣寛

#### (1) 宇宙論的生命主義論

熊本に生まれた志垣寛は1910年の熊本師範学校卒業後、熊本第二師範学校附属小学校訓導、奈良女子高等師範学校附属小学校訓導を経て、1919年に同文館に入社し、雑誌『小学校』の編集に従事する。1921年に原敬内閣の義務教育費削減政策に反対した教育擁護同盟に名を連ね、1923年には同同盟で顔を合わせた同志と教育の世紀社を設立する。池袋・児童の村小学校では主事を務めた志垣だが、1925年秋、日本の新教育期の自由主義教育とは大きく異なるソビエト教育学の真相を確かめるべくロシアに視察旅行に向かう<sup>70</sup>。帰国後は下中弥三郎社長の平凡社に入社して編集長に就き、現代大衆文学全集(1927年)と世界美術全集(同年)の出版を成功させたが、講談社の『キング』に刺激を受けた大衆雑誌『平凡』(1928年)が軌道に乗らず、わずか五号で廃刊となり、三年後の平凡社経営破綻の原因となる。これを受けて志垣は下中社長に引責辞任を申し出たものの、懐深い下中によって平凡社子会社である文園社の社長に任じられる<sup>71</sup>。

1920年代、志垣は中心的に携わった『教育の世紀』を筆頭に多くの雑誌に寄稿し、また著作も相次いで刊行しており、精力的に執筆を行っていた。1920年代前半、志垣は教育の一切の原理を「生命」に置く生命主義教育論を展開していた。それは「生命至上の教育」、「教育原理としての生命」、「生命の個性に徹せよ」といった著作の表題に示唆されるのみならず<sup>72</sup>、「わが信ずる教育は生命と終始し、生命を以てその第一原理とする」<sup>73</sup>との確言に明らかである。志垣は教育を以下のように定義している。

教育といふものは、指導者の露骨な干渉を排拒する。たゞちつと子供の天分—僕はそれを子供に芽ぐめる生命といふのであるが、その生命の表現をじつと凝視してゐる。一時も油断なしに眞摯に、熱烈に、あふるゝ愛情をたゝえてその生命の發露を凝視してゐる。そしてその伸展を扶けてやることである。<sup>74</sup>

徹底して子どもの「生命」の伸長発展を見守り、支えるという教育観である。実際、志垣は生命主義者を自認さえしていた。1925年、当時の教育思潮の二大傾向として新カント派の新理想主義哲学とベルクソンらに代表される生命主義哲学を指摘し、自身が生命主義者であることを告白している<sup>75</sup>。

では、志垣における「生命」はどのようなものであったのだろうか。それは個人の内発本性を意味し、彼の教育論の個性尊重と個人主義を規定した原理であったが<sup>76</sup>、同時に宇宙論的な存在でもあった。「吾々の生命は宇宙の生命と共に一個の實在である。私は信ずる。私

に宿れる生命は、宇宙の生命の一角に過ぎない<sup>77</sup>。つまり、「宇宙萬有包一全」であるところの「生命」が出来たものが「個人」であり、個人においてそれが表現されたものが「個性」であると志垣は捉えていたのである<sup>78</sup>。さらに詳しく見ると、宇宙論的存在であると同時に、社会的存在、歴史的存在でもあったことが分かる。生命は、その生長が環境たる国家社会と不即不離である点において社会的存在であり<sup>79</sup>、その由来が親、祖父母、さらに祖先へと遡る点において歴史的存在であると論じられる<sup>80</sup>。「生命はかくの如く、時代的に考へると歴史のものであり、環境との関係を考へると社会的のものである。歴史的社会的存在物である生命のほしいまゝなる生長、それがどうして國家社會や傳統を無視する事が出来よう、無視しようにも、されやうがないではなからうか<sup>81</sup>。「生命」から出来た「個人」、そしてその表現である「個性」は、環境や遺伝と不可分なものとして見做されている。

このように志垣の「生命」は、個別具体的な個人を指しながら、一方で宇宙論的な存在でもあった。このうち後者の宇宙論的側面、そして環境から影響を受けるという社会的側面においては赤井のそれと共通すると言えるが、そこに血縁的歴史的側面を認める点は赤井とは異なっている。両者についてこの時期の宗教観を比較すると、赤井が宗教教育論者であったのに対して志垣は「未だ宗教の境地には行き着かない」と否定的である<sup>82</sup>。また、志垣、赤井における「生命」を下中のそれと比較した際、下中はあくまで現実の子どもの「生命」のみを捉えようとしており、志垣、赤井とは異なる生命観に立っていたことが分かる。一方で、志垣と下中に共通する側面もある。それは両者の「生命」概念の思想的背景にベルクソン哲学を指摘できることである。

足立が指摘したように、1920年代の志垣の生命概念はベルクソンから強い影響を受けたものであった。H・ベルクソン(1859-1941)は世界の窮極根底をなす真の实在を、跳躍して流れる「生命」に見出し、生命という流動的な实在は進化(évolution)という過程を辿り、その生命の躍動(élan vital/élan de vie)において個別具体的な有機体として分化・現出すると論じた<sup>83</sup>。こうした生命論は、志垣の宇宙論的で歴史的一体的な生命観と符牒が合う。実際、先に触れたように志垣自身自認する生命主義の代表者としてベルクソンの名を挙げており、志垣が思想的影響を受けたことは言うまでもない<sup>84</sup>。

ではこの時期、学校教育についてはどう論じていたのだろうか。教育の世紀社設立は志垣自身の教育論の実現を意図したものであるが<sup>85</sup>、その背景には明治以来の学校教育への痛烈な批判意識がある。本来「生命的」でなければならない教育が、学校教育においては「器械的」となり、資本主義化し、「器械工業式大量速産法の教育」<sup>86</sup>と化していることへの危機意識である<sup>87</sup>。志垣は具体的な批判の矛先を、画一的一斉教授や時間割、概念羅列的な教材に向け<sup>88</sup>、教室空間を前提とした講壇哲学、講壇教育学をも名指して批判し<sup>89</sup>、「學校を没落せしめよ」<sup>90</sup>と語気を強めていた。つまり、志垣は近代教育の制度、形式、内容を「生命」の喪失として批判するのである。近代教育の代替として自由裁量の余地のある寺子屋的教育を提示しており、また近代教育批判の文脈でO・シュペングラーやR・タゴールに言及したことに鑑みるに<sup>91</sup>、志垣は「生命」を梃子として学校教育という「近代」の超克を企図していたことが分かる。明治以来の近代学校教育を資本主義に従属する教育形態と把握してその制度、形式、内容を否定し、「生命」のみを掲げた教育論として、志垣の学校教育批判論は下中のそれと等しいものであったと言えよう。

## (2) 生命主義世界実現のための教育

1930年以降の志垣は、文園社争議（1930年）を機に会社こそ去ったものの、1920年代以来の教育評論や雑誌編集活動を継続しながら、赤井と同じく郷土教育連盟（1930年）に所属して郷土教育論を説いていた。また1938年には下中、赤井らとともに世界維新教育協会に名を連ねて事務局長まで務め、戦時体制下では大日本興亜同盟編集部長を務め、1943年には大日本教育会の発足に尽力していた。転機はありながらも、旺盛な活動意欲は新教育期から続いていたと見てよいだろう<sup>92</sup>。

1930年代になると、志垣の教育論の主張は変わることとなる。郷土教育連盟で活動していた頃、志垣は「農村は何故に貧しいか。それは商工本位の資本主義によつて搾取されるからである。農村を搾取するものは地主よりも、むしろ都會そのものである」<sup>93</sup>と、農村の窮状の原因を都會的資本主義文明に求め、商工業を批判していた。そして教員の最重要責務を、農民と共に共同戦線を張り、商工資本主義による搾取から農村を救うことと位置づけていた<sup>94</sup>。志垣の農村教育観は下中のそれと酷似するものであり、このことは志垣が自身の農村教育論の結論で下中の「万人労働の教育」論を紹介し、称賛したことにも表れている<sup>95</sup>。志垣の主張は、1932年には次のようなものとなっている。「私の言ふところは、農村教育をしっかりとやれと言ふのである。農村教育をしっかりとやれと言ふ事は、日本建國の精神に立ち返つて「農ハ國ノ本ナリ」に徹する事である」<sup>96</sup>。この時期、かつての大正期の教育は「立身出世一成功立志」の手段に過ぎないもので<sup>97</sup>、「資本主義制度の維持補強の爲のごかまし」であつたと回顧され<sup>98</sup>、郷土教育においては農村の窮状打破の活路として「国家」が強調され、志垣の教育論は国家主義教育論の様相を呈するようになる。志垣にとって農村の窮乏という現実には衝撃的であつた。「一個の鋏、一個の糊さへも容易に得られない農村に於て、彼等が何を目ざして教育を營みつゝあるかを考へるとき、日本の教育について再考すべき多くがあると思つた」<sup>99</sup>と回顧しており、これが志垣の教育論の転換点であつたことが分かる<sup>100</sup>。

1940年以降、志垣は生命主義世界観を自家薬籠中のものとし、「日本に於ける教育の目的は皇國民としての完成である」<sup>101</sup>と論じるようになる。志垣の生命主義世界観は、『教育動員論』（1941年）において次のように説明されている。

今日の皇國教育の基調は言ふまでもなく全體主義である。全體主義と言ふ言葉にこだわつてそれが獨逸舶來の思想で、もあるかのやうに考へるのは考へすぎである。全體主義哲學の代表的なものは、生命哲學である。世界を一個の生命體であると解する哲學である。…（中略）…日本が神武の昔からとり來つてゐる所謂八紘一宇の精神こそ即ちこの生命主義世界觀の表現である。即ち萬邦得所の精神—世界のあらゆる國々が生命體を結成する細胞として互に相扶け相築えて行く事を希念するところに日本精神の偉さがあるのである。<sup>102</sup>

志垣が大正期に教育原理と見做した「生命」は、明確に「世界」を捉え、世界を全体主義的に把握する哲学原理として論じられており、神武以来の八紘一宇による世界観こそがそれを表現したものと説明される。これは下中の生命国家論、またそれを摂取した赤井の世界観と軌を一にするものである。そして驚くべきことに、こうした全体主義的な生命哲学と明治期から大正期にかけて流行した「生の哲学」との直接的な関係性が、また教育分野における生命主義世界観を支える皇国教育と「生命」を原理とする新教育運動との連続性が主張される

のである。先に引用した『教育動員論』は以下のように続いている。

この考へ方—生命主義的世界観は嘗て日本の新教育者が守り本尊として來つたところのものである。…(中略)…新教育の守り本尊はデルタイであつた。シュプランガーであつた。ベルクソンであつた。そして又タゴールであり、遡つてはニイチエでありショーペンハウエルであつた。何れもそれは生の哲學者と云ふ範疇に屬する人々である。シュペングラーもガイザリングも吾々に多くの影響を與へている。そして今日の全體主義がこれらの影響なしに突如として生れ出たものと見る者は一人もなからう。古き日本の八紘一宇の精神そのものから、直ちに今日の全體主義的世界観が生れ出たと解するのは誤りである。<sup>103</sup>

志垣が依拠する生命主義世界観は、古代日本の「八紘一宇」そのものではなく、それがW・ディルタイやベルクソン、A・ショーペンハウエルら西洋由来の「生の哲学」の思想に影響を受け、再定位した世界観であつたわけである。このように大正期から昭和期にかけての思想の連続性が取立て言明されたことは重要である。新教育、そしてベルクソンを筆頭とする生の哲学はおそらくは志垣自身の自覚的な思想であり、そこにアジア・太平洋戦争期の「八紘一宇の精神」が直接的に接合するものと理解されていたことは、少なくとも生命主義者としての志垣は自覚的には新教育運動以来一貫しえていたことを示している。

こうした「八紘一宇」を理念とする生命主義世界の実現こそが教育の目的に据えられたことで、志垣の教育論は1941年から1943年にかけて、教師には「教師は國士である。國士に俸給はない。…(中略)…國士は君國あつて妻子あるを忘る」<sup>104</sup>ことを説き、国民学校は「すめらみことのために一個の棄石となることに至上の喜びをもつ人々を作」<sup>105</sup>る機関であることを論じるものとなる。また家庭教育については「兵隊に召し出されることは、これは親も諦める 陛下に捧げた子だから諦める。…(中略)…それが教育動員の狙ひ處だ」<sup>106</sup>と、積極的に我が子を生命世界実現に動員することを勧める教育論となるのであつた。

#### 4. 野村芳兵衛

##### (1) 「無量寿」への生命信順

野村芳兵衛は岐阜県に生まれ、岐阜師範学校を卒業後、洞戸尋常高等小学校、岐阜県女子師範付属尋常高等小学校の勤務を経て、1924年に池袋・児童の村小学校の教師となる。同校では様々な葛藤を抱えながらも1936年まで教鞭を執り、主事も務めていた。この間、野村は単著の発行や雑誌への寄稿など多くの著述をものしている。また1929年には古砂丘忠義、上田庄三郎、峯地光重らと雑誌『綴方生活』を、35年には『生活学校』を刊行しており、綴方教育や実践記録といった民間教育運動における中心的役割を果たしていた。

野村の思想については、中内、今井、浅井、木下が指摘し、また野村自身も「主観理想主義を克服して、客観功利主義を建設した」と『生活訓練と道德教育』(1932年)に自覚的に綴っているように<sup>107</sup>、1930年頃に一つの転換点を迎えたと考えられており、こうした見方を批判した冨澤も分析の過程では時期区分として前期(大正期)と後期(昭和期)を分けている。以下、大正期から見ていこう。

野村の教育観は、処女作である『文化中心修身新教授法』(1925年)に端的に表れている。

ここでは教育が「最も純に最も聡明に生命に信順すること」であり、「教育の目的も、生命信順であり、教育の方法も生命信順である」と断言されており<sup>108</sup>、野村もまた自身の教育思想の核心に「生命」を据えていたことが分かる。「生命主義を捧ずる者は我が児童の村である」と、明示的に生命主義を掲げ、実践と向き合っていたのである<sup>109</sup>。野村の著述には大正期から昭和期にかけて継続して多くの「生命主義」の語がみられる<sup>110</sup>。

では、野村における「生命」とは何であり、「生命信順」は何を意味していたのだろうか。「生命」は宇宙論的に拡張して把握された阿弥陀如来とその他力のことであり、野村はそれを「無量壽」と記している<sup>111</sup>。「無量壽」とは無量の寿命をもつ阿弥陀仏（「無量壽仏」）を意味する言葉であるが<sup>112</sup>、野村は時間的に永遠である阿弥陀如来のはたらきを宇宙唯一にして全を意味する実在と見定め、それを「生命」と称したのだろう<sup>113</sup>。「生命信順」とはその「生命」によって教師と生徒がともに導かれることを意味している<sup>114</sup>。「信順」の語は親鸞の名著『教行信証』に依ったと考えられよう<sup>115</sup>。

野村は生命信順の教育に関して『新教育に於ける学級経営』（1926年）において以下のように述べている。

本當の意味に於て、生活を導くものは、如来であつて、私たち教師ではないと私は信じてゐる。子供が導かるゝやうに、私も導かれるのである。だから教師としての私が生活指導を考へると云ふことは、どうしたら子供と共に如来に信順し得るかと思ふことなのである。<sup>116</sup>

ここでは教師—生徒間の教育関係は否定され、「如来」こそが生活を導くと示されている。つまり野村は浄土論に依拠し、親鸞が示した、本願力と往生成仏を遂げる私との在り方を指す「自然法爾」を、宇宙論的な「生命」と教師並びに生徒との関係に援用し、教育の本質を「自他を超えた無量壽への全的信順」<sup>117</sup>に置く教育論を説いたのである。こうした教育観であったから、野村はこれを「教育意識なき教育」、「協力意志に立つ教育」と称しえたのである<sup>118</sup>。

周知のように野村は岐阜県の旧洞戸村尾倉という土徳の篤い地域に生まれ、熱心な親鸞教徒の両親に育てられた。そして人生論的煩悶に直面していた師範学校三年次、自らの迷いを直接相談した仏教学者・梅原真隆（1885-1966）に薫陶を受け、それが決定的契機となる形で親鸞の思想を人生の大きな指針にするようになる<sup>119</sup>。教育—被教育関係を否定する姿勢は、「弟子一人も持たず」と伝えられる親鸞の師弟観を想起させる。また親鸞思想の根幹である悪人正機説への理解も、『文化中心修身新教授法』の巻末に綴られた内面吐露に伺える。「この書の全體は殆んど、私たちが共食せねば生きられない宿業的な罪惡が見失はれて思索されてゐます。…（中略）…如来に恵まれた祈願の生活でだけ、有限共食の罪人である私がそのまゝ、無限の生命に攝取されることを信じます」<sup>120</sup>。近代教育的な教育関係を構築しようがない「極悪深重の身」という自己理解であろう<sup>121</sup>。

## (2) 「国体」への生命信順

1930年代に入っても野村は引き続き池袋・児童の村小学校の教壇に立っていたが、1936年に経営が立ち行かなくなると同校は閉校となり、その後は現千葉県市川市の日の出学園に赴任して4年半勤めていた。自身を招聘した平田華蔵学園長の退職を機に野村も辞し、1942年からは生物の学習を始め、翌年12月に師範学校中学校高等女学校教員検定の「植物科」に合

格する。1944年には茨城県の下妻高等女学校に招かれ、1945年5月から7月は学徒動員として工場に向いて寮生活の中で生徒と寝食を共にしながら働き、同月下旬以降は生徒たちと利根川堤を開墾して蕎麦を育てるなか、終戦を迎えている<sup>122</sup>。

昭和期になると、野村の教育論に「国体」や「天皇」といった言葉が散見されるようになる。確かに大正期にも明治国家以来の国家像は垣間見えたものの<sup>123</sup>、彼の生命主義教育論において積極的に展開されたものではなかった。かつての観念的な教育論は姿を変え、宗教に生活の本質規定を求め、科学に生活の現実規定を求める生活教育が彼の主張の中心となる<sup>124</sup>。具体的には、果たすべき教育は「国体信仰の上に立った教育」であり、その目的は国民生活の組織化であると、教育を国家（「国体」）に依拠・従属するものと捉えるようになる<sup>125</sup>。このような野村の実践的・現実的な教育観への変容を指して中内は「神学から人間学への転回」<sup>126</sup>と表現したのであろう。野村における教育は、あくまで国家を前提に、国民教育として国民統制を目的とするものとなる<sup>127</sup>。1930年前後に相次いだ世界恐慌、昭和農業恐慌によって農村の困窮は苛烈を極めるなか、綴方教育と関わりのあった野村がその惨状を目の当たりにし、自らの思想に限界を感じたことも想像に難くない<sup>128</sup>。先に「主観理想主義を克服して、客観功利主義を建設した」とする野村自身による思想の転換の告白を見たが、その『生活訓練と道徳教育』は野村が自己反省に迫られて著したという。その自己反省とは、池袋・児童の村小学校が「生活教育」を掲げながらも1930年前後の未曾有の恐慌を直視せず、経済問題に触れ得ず、空想的な教育に留まっており、真の生活教育たりえていなかったとする反省である<sup>129</sup>。大人たちも含めた学校外での生活を視野に入れるとき、従来の教育論からは転換せざるを得なかったのである。

こうした思想的葛藤、そして転回を経るなかで、野村は国家（「国体」）を一つの生命体と把握する生命国家論を唱えるようになる。その具体的な表出は、1935年6月、忠君愛国の精神と国体観念の明徴化が強調された1934年の国定修身教科書の改訂、所謂第四期国定修身教科書の解説書において、国体の積義として、美濃部達吉による天皇機関説への批判を伴う形で言語化される。

日本國體は皇室中心の生命體である。従つて、天皇を親とする國民の同胞的協働自治が、日本國體の組織であり、又日本國體の精神であり、又日本國民の生活様式でもある。…（中略）…最近、美濃部博士の「天皇機關説」が問題になつたやうであるが、天皇機關説の一番大きい誤は、その抽象主義・概念主義にある。天皇位は勿論國家統制の位置であるであらうが、天皇は、單なる位置でなくして、一つの親である。親は單なる位置ではない。それは生命である。我が國の天皇は、國民全體の仲間の親としての生命であらせられるが故に、よく政治的な統制以外に人格的な統制の主體であらせられるのである。<sup>130</sup>

日本国体は天皇を親とする一体的な「生命体」であり、天皇も同様に「生命」であり、生命である天皇（「国体」）は国民を統制する主体であると述べられている。ここにはまず、大正期の野村の「生命」が現実社会の具体的な実体を指しはしなかったこととの大きな懸隔が認められる。昭和期、野村は「国家」を自然な生命体と類比的に捉え、「八紘為宇」を理念とする「一大家族」と理解していた<sup>131</sup>。共同体社会を生命体アナロジーにおいて把握することは国家のみならず学校にも適応されている<sup>132</sup>。注目すべきことに、第四期国定修身教科書には

天皇の万世一系や国体の君民一体の様子は描かれるものの、それを生命体として把握する記述は見あたらない<sup>133</sup>。菊池武夫議員による美濃部学説批判演説が1935年2月であり、機関説排撃運動の高揚を経て、同年8月と10月に国体明徴声明が出されている。つまり野村は生命国家論を、機関説排撃の擡頭と時を同じくして、かつて自らが第一義に据えた「生命」に国体や天皇を当てはめ、高唱したのである<sup>134</sup>。

この時期の野村の国家論を特徴づける言葉に「ゲマインシャフト (Gemeinschaft)」がある。無論これはF・テンニエス (1855-1936) の提唱した集団類型の一つであるが、野村はゲマインシャフトこそが生命国家日本を指したものであると主張していた。「私は今日の時代精神である生活の組織化は、ゲマインシャフトの主張によつてのみ本當に達成されるものであることを、確く信じて疑はないものである。… (中略) …日本の國體は天皇を親とした生命體の國家であり、ゲマインシャフトの國である」<sup>135</sup>。テンニエスがゲマインシャフトを「実在的有機的な生命体 (reales und organisches Leben)」と説明していることは非常に興味深い<sup>136</sup>。非合理的な本質意志によるゲマインシャフトから合理的な選択意志によるゲゼルシャフトへと文明は進むとする分析は1883年のものだが、テンニエスの視線が悲觀的かつ文明批評的であることを踏まえると、ゲマインシャフトは生命主義の系譜に位置づく集団觀念の一つであると言え、野村が生命国家の社会規範を「ゲマインシャフト」に求めたことにも合点がいく<sup>137</sup>。

大正期には生命を全とし、人間を部分とみなしていた野村であったから<sup>138</sup>、人間ではなく全なる生命に価値が置かれることは察するに余りある。「信ずるに價するものは善悪と言ふものよりも、もつと根本的な親心 (全體性・一般者) つまり生命そのもの」<sup>139</sup>と断言され、剩れ全体のためには部分の犠牲を厭わないことが論じられる<sup>140</sup>。人間が「生命」(「国体」)の統制の対象とされたことは先の引用に見たとおりであり、すなわち野村の生命觀の必然的帰結として、個よりも全体を重んじる「全体主義」が露わとなる。「眞の全體主義は、ドイツの如き獨裁主義に行くべきでなく、我が國の如く生命主義に行くべきである」<sup>141</sup>と、生命たる日本国体の在り方として全体主義が位置づけられるのである。ドイツではなく、日本の生命主義こそを全体主義の核心とみたことは、志垣の認識とも通じるものがある。天皇を中心とする生命国家論としては当然、下中、赤井、志垣に共通する昭和期の生命思想といえる。

このように国家生命を要諦とする全体主義的な国体論を奉じたことで、野村の教育論が多分に全体主義的・国家主義的な傾向を帯びるに至ったことは言うまでもない。

国民教育の指標は… (中略) …人間的信念と国体精神とを一致させる教育であらねばならぬ。吾々は、子供達が、何時如何なる場合に於ても乱れることのない人間的信念として、共同体社会に立脚した我が国体に対する信念、親子統制的兄弟自治の達成のための永遠の努力を確信させねばならぬ。<sup>142</sup>

「人間的信念と国体精神を一致させる教育」を声高に唱えている。具体的には、国体への信念、また親たる天皇による統制こそを教育内容とすべきとする主張である。一見大正期の野村の教育論とは大きく乖離しているが、「生命信順」の教育論として見た場合、その変化は生命に具体的な「国体」が充てられているに過ぎない。「親鸞は「一向に如來に任せよ」と教へられた。吾々は親鸞のこの言葉を信ずることによつて、如何に煩惱強き人も、患者も賢者も

悉く、平等にこのありがたき生活に入ることが出来るのである。…（中略）…勅を受けてはかしこむと言ふ日本人の本性がそのまま、宇宙生命への信順となつてゐる」<sup>143</sup>。阿弥陀如来と天皇が重ね合わされており、つまりは「他力」と「大御心」が「生命」として同一視された真俗一元論と言えよう<sup>144</sup>。大正期には「自然法爾」をモチーフとして教師と生徒のはからいを否定し、無量の寿命をもつ全なる「生命」への信順を説いた野村の教育論は、昭和期に入り「生命」が「天皇」あるいは「国体」として具現化したことで、国家生命への信順を説く全体主義・国家主義的な教育論と化したわけである。

## 5. 結語—本研究の総括と達成

大正新教育期、赤井は超越存在「神（生命）」を被教育者に体现せしむることを教育目的に据え、志垣は個人の内発本性である「生命」の成長を第一とする教育論を説き、野村は生活の一切を「生命」にゆだねることが教育の方法であり教育の目的であると論じていた。三者とも「生命」を基軸概念として自らの教育論を構築していたのである。このとき、彼らの「生命」の由来、意味内容に幅があった点は新教育運動のひとつの特徴といえる。赤井はエマソンに強い影響を受け、歴史や遺伝とは無関係な、宇宙論的で超越的な「神」を「生命」と見做していた。志垣はベルクソン哲学に触発を受け、個別具体的な子どもを指すと同時に赤井と同じく宇宙論的な存在として「生命」を構想していたが、その「生命」が個人として現出する際に血縁的歴史的要因を認める点は赤井と相違していた。野村は親鸞思想を摂取し、宇宙唯一の实在を無限のいのちをもつ阿弥陀如来と同一視し、それを「生命」と称していた。

1930年代になると、赤井、志垣、野村の生命思想は変容する。教育理想の象徴であった「生命」は、天皇（皇室／国体）を中心とする「生命国家」あるいは「生命世界」として現実世界に顕現しうるものとなり、彼らの教育論はそうした八紘一宇的な生命的新秩序の建設を鼓舞するものとなる。赤井は昭和恐慌、農業恐慌で貧窮に喘ぐ国民生活を憂い、新国家建設によってそれを打破することを模索するなか、下中弥三郎から生命国家論を摂取し、1938年以降に自ら唱えるようになる。アジアへの侵出は「民族生命、世界生命の躍動」として正当化され、細胞とされた国民は国家生命全体のために犠牲になることが要求されるに至る。志垣において生命国家論は1941年頃から鼓吹され始める。彼の生命主義論の特徴は、全体主義思想の起源と妙諦をドイツ思想ではなく日本の生命国家論にこそ看取した点であり、また大正期の新教育運動ならびに生の哲学と八紘一宇を原理とする全体主義的生命哲学との直線的連続性が言明された点である。志垣は少なくとも自覚的には一貫した生命主義者であったろう。野村は1935年、国定修身教科書の解説において、天皇機関説批判を伴う文脈で生命国家論を高唱し始める。生命を全とした大正期の生命観は引き継がれ、国家生命という全体を優先する全体主義思想を奉じるようになる。全体主義の真髓を日本の生命主義と見定めた野村は阿弥陀如来と天皇を重ね合わせる真俗一元論に立ち、国体という国家生命への信順を説くのであった。

大正期の下中はアナーキストとして宗教や観念に否定的であり、具体的な子どもの「生命」にのみ焦点を当てていたが、それでも彼の「生命」は超越観念化しつつあるものであった。これは下中が近代学校教育の制度や形式の反措定として「生命」を掲げたためであり、先に見た志垣にも認められる特徴である。では赤井、野村の場合はどうであろうか。両者におい



ても「生命」は同様の役割を果たしていたと言えよう。赤井における「神（生命）」、野村における「無量寿（生命）」は、いずれも子どもを導く存在であり、教師という人間よりも超越者こそを指定し、教育者として教育の根幹に位置づけたのである。

昭和期に入ると彼らは、言説展開の時期の遅速こそあれ、日本国家を一つの生命体と捉える生命国家論を主張するに至る。実のところ、赤井、志垣、野村、そして下中に共通するのは生命国家論のみならず、1930年前後の農村の窮乏という危機的状況の体験である。教育の本質を子どもの生命の成長に、あるいは超越的生命による教育に置いていた彼らは、農村民の生命の喪失という惨状を目の当たりにする。そしてその原因を西洋資本主義文明による搾取と見定め、教育理想の象徴にして近代教育の反措定であった「生命」を、商工業を中心とする西洋資本主義文明そのものの超克を企図し、日本の国家規範である「生命国家論」として鋳直し、国民の生命の快復の活路を生命国家の顕現に見出したのである。そのため日本の国家形態が争点となった天皇機関説問題に際して、野村および下中において生命国家論が強調されたのは必然であったろう。日本は天皇を中心とする生命国家（「国体」）であるとして近代国民国家の原則である法治主義・議会主義は否定されたのであり、それは同時に個人主義、自由主義を否定して全体主義こそを皇国の原則とすることを意味するものであった。生命国家論は戦前日本における全体主義イデオロギーの軸となる具体的思想として表明されたわけであり、彼らの生命主義教育論は国家主義的・全体主義的なものとならざるを得なかったのである。

近代日本にあって「生命」は、実体でありながら機能でもあり、経験的でありながら超越観念的でもある奇妙な二重体であった。明治初期、「Life」の翻訳語として流布した「生命」は経験的な実体を意味する側面が強かったが、明治の後半からは変調する。哲学の主題の一つに世界の窮極根底をなす真の实在を何と見るかとする議論があり、キリスト教は「神」に、ドイツ観念論哲学は「精神」に、あるいは実証科学や唯物論は「物質」に見出すなどしてきたが、19世紀から20世紀にかけてはベルクソンらを筆頭として「生命」を真の实在と見定める主張が台頭してきた。こうして「生命」は世界を説明する原理として超越観念たりえ、また機能たりえ、ある特定の歴史的・社会的制度である「国家」にも投影されてしまう。尊重すべき「生命」が「国家」と同一化したとき、国家生命は個人的生命を全体を支える「細胞」として遇し、生殺与奪の力を奮うのである。

## 注

- 1 伊東順真「下中弥三郎における生命主義教育論—デモクラシーとファシズムの〈間（あいだ）〉」、『教育学研究』, 日本教育学会, 第88巻第3号, 2021年, 394-405頁
- 2 中野光「大正期教育運動の指導者・下中弥三郎」、『国民教育』, 国民教育研究所, 第20号, 1974年, 122頁
- 3 劫火生「教育の世紀社の懇談會に臨んで」、『教育の世紀』, 教育の世紀社, 創刊號, 1923年10月, 147頁
- 4 磯田一雄「教育の世紀社」, 民間教育史料研究会・大田堯・中内敏夫編『民間教育史研究事典』, 評論社, 2022年, 284頁
- 5 堀尾輝久『天皇制国家と教育—近代日本教育思想史研究』, 青木書店, 1987年, 379頁。志垣もまた「児童の村をもって日本新教育の頂点にたつ」と自認している(志垣寛『教育太平記—教育興亡五十年史』, 洋々社, 1956年, 111頁)。
- 6 教育の世紀社の「宣言」では「生命の自由の發展伸長」を尊重すべきことが謳われ、「『児童の村』プラン」では「流轉伸長して止まぬ人間の生命」を解放し、「自分一個の生命の囁きに從」うことの価値が説かれている(『教育の世紀』, 教育の世紀社, 創刊号, 1923年10月, 2, 6, 9頁)。
- 7 赤井米吉「教育的創造」, 『教育問題研究』, 教育問題研究会, 第4号, 1920年7月, 25頁
- 8 志垣寛『生命至上の教育』, 大同館書店, 1923年, 264頁
- 9 野村芳兵衛『文化中心修身新教授法』, 教育研究会, 1925年, 71頁
- 10 鈴木貞美『生命観の探究—重層する危機のなかで』, 作品社, 2007年, 11頁
- 11 鈴木貞美『「生命」で読む日本近代—大正生命主義の誕生と展開』, 日本放送出版協会, 1996年, 251頁
- 12 磯田一雄「野村芳兵衛の生活教育思想」, 『教育学研究』, 日本教育学会, 第34巻第1号, 1967年, 60頁, 同「『教育の世紀社』の教育思想—「児童の村小学校」成立の背景として」, 『国際基督教大学学報 I-A, 教育研究 = Educational Studies』, 第19巻, 1976年, 5, 18頁, 中内敏夫『生活綴方成立史研究』, 明治図書, 1970年, 898頁など, 同「生命」, 民間教育史料研究会・大田堯・中内敏夫編前掲『民間教育史研究事典』, 95-96頁
- 13 足立淳「『教育の世紀社』における志垣寛の教育論に関する基礎的研究—その「生命」原理に着目して」, 『教育史研究室年報』, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科, 第16号, 2010年, 1-28頁, 橋本美保・田中智志編『大正新教育の思想—生命の躍動』, 東信堂, 2015年, 富澤美千子『野村芳兵衛の教育思想—往相・還相としての「生命信順」と「仲間作り」』, 春風社, 2021年, 川上英明「大正生命主義の思想圏における木下竹次の合科学習—「総合的な学習／探究の時間」の思想史のために」, 『山梨学院短期大学研究紀要 = Bulletin』, 第42号, 2022年, 31-42頁
- 14 中野光『大正自由教育の研究』, 黎明書房, 1968年, 同「沢柳精神の継承者〈赤井米吉〉」, 同『教育改革者の群像』, 国土社, 1991年, 99-124頁, 坂井俊樹「戦前における「社会の学習・研究」を課題とする教育実践の検討—志垣寛, 赤井米吉の郷土教育論を中心に(その2)」, 『社会科教育研究』, 日本社会科教育学会, 第54巻, 1986年, 20-29頁, 足立淳「赤井米吉の教育思想に関する研究ノート—先行研究の整理を中心に」, 『教育論叢』, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻, 第50巻, 2007年, 15-24頁, 同「1920年代日本におけるドルトン・プランの批判的摂取—赤井米吉の宗教的教育思想に着目して」, 『教育学研究』, 日本教育学会, 第78巻第3号, 2011年, 251-262頁, 同「赤井米吉の教育思想における西田哲学の影響—両者の「自覚」概念の同質性に着目して」, 『教育新世界』, 世界新教育学会, 第65巻, 2017年, 18-23頁, 李舜志「一九二〇年代の赤井米吉の芸術と宗教—共鳴と祈りの心について」, 橋本美保・田中智志編前掲書, 443-466頁
- 15 中野前掲『大正自由教育の研究』, 260-261頁, 前掲「沢柳精神の継承者〈赤井米吉〉」, 119-120頁, 足立前掲「赤井米吉の教育思想に関する研究ノート—先行研究の整理を中心に」, 19-20頁
- 16 中内前掲『生活綴方成立史研究』, 同「『野口援太郎・下中弥三郎』問題と他の同人の役割」, 民間教育史料研究会編『教育の世紀社の総合的研究』, 一光社, 1984年, 66-76頁, 伊津野朋弘「大正期「教育の自由」思想の一考察—志垣寛の場合を中心に」, 『北海道教育大学紀要, 第一部・C, 教育科学編』, 第24巻第1号, 1973年, 1-14頁, 上野浩道『芸術教育運動の研究』, 風間書房, 1981年, 中野光「反逆と遍歴の同志〈志垣寛・

- 桜井祐男〉, 同前掲『教育改革者の群像』, 126-160頁, 足立前掲「『教育の世紀社』における志垣寛の教育論に関する基礎的研究—その「生命」原理に着目して」, 同「1930年代初頭における大正新教育批判の文脈—志垣寛の動向と言説に着目して」, 『教育史研究室年報』, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育史研究室, 第20号, 2014年, 1-28頁
- 17 足立前掲「『教育の世紀社』における志垣寛の教育論に関する基礎的研究—その「生命」原理に着目して」, 22頁
- 18 中内前掲『生活綴方成立史研究』, 今井康雄「野村芳兵衛における「教育意識」否定の論理—「教育意識」の否定から「自然の組織化」へ」, 『広島大学教育学部紀要 第一部』, 第35号, 1986年, 1-8頁, 浅井幸子『教師の語りと新教育—「児童の村」の1920年代』, 東京大学出版会, 2008年, 木下慎「野村芳兵衛の教育思想—愛と功利の生活教育」, 橋本美保・田中智志編前掲書, 486-517頁, 富澤前掲書
- 19 学園史編集委員会編『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』, 明星学園, 1974年
- 20 赤井前掲「教育的創造」, 25頁
- 21 同上
- 22 赤井米吉「再び教育的創造を論ず」, 『教育問題研究』, 教育問題研究会, 第8号, 1920年11月, 69頁
- 23 赤井米吉「宗教教育」, 同『愛と理性の教育』, 平凡社, 1964年, 127-128頁
- 24 足立前掲「1920年代日本におけるドルトン・プランの批判的摂取—赤井米吉の宗教的教育思想に着目して」, 255-256頁
- 25 三吉明『本間俊平傳』, 新約書房, 1962年, 12-13頁, 国守進「人物風土記(14) 本間俊平」, 山口県教育庁企画室編『教育広報』, 山口県教育委員会, 第241号, 1968年, 19頁
- 26 本間俊平『私の教育』, イデア書院, 1923年, 8頁
- 27 同書, 11頁
- 28 赤井前掲「宗教教育」, 122-123頁
- 29 赤井米吉「本間俊平先生」, 『全人教育』, 玉川大学通信教育部, 第170号, 1963年, 3-6頁
- 30 足立前掲「1920年代日本におけるドルトン・プランの批判的摂取—赤井米吉の宗教的教育思想に着目して」, 255頁
- 31 同論文, 256頁, 赤井米吉「ダルトン案の教育と私たちの試み」, 『帝國教育』, 帝国教育會, 第486号, 1923年1月, 12-14頁, 同『ダルトン案と我國の教育』, 集成社, 1924年, 57頁
- 32 赤井前掲「ダルトン案の教育と私たちの試み」, 12頁
- 33 市村尚久『エマソンとその時代』, 玉川大学出版部, 1994年, 66, 73-76頁, エマソン「大霊」, 同『エマソン論文集(下)』酒本雅之訳, 岩波書店, 1973年, 10-11頁
- 34 鈴木前掲『生命観の探究—重層する危機のなかで』, 194-196頁
- 35 赤井米吉「人間植物の教育—ルーサー・バーバンクを憶ふ。』, 『教育學術界』, 大日本學術協會, 第53巻第3号, 1926年6月, 36頁
- 36 学園史編集委員会編前掲書, 26頁
- 37 赤井前掲「人間植物の教育—ルーサー・バーバンクを憶ふ。』, 27-36頁
- 38 赤井米吉『體驗の教育』, 集成社, 1926年, 3-5, 45, 51-52頁
- 39 海老原治善「自由教育運動から郷土教育運動へ」, 菅忠道編『日本教育運動史 第三卷 戦時下の教育運動』, 三一書房, 1960年, 23-42頁
- 40 「第一回研究座談會 郷土教育について」, 『新教育雑誌』, 新教育協會, 第1巻第4号, 1931年4月, 57頁
- 41 足立前掲「赤井米吉の教育思想に関する研究ノート—先行研究の整理を中心に」, 17-20頁, 伊東前掲論文, 399-400頁
- 42 赤井米吉「批評」, 『郷土科學』, 郷土教育連盟, 第12号, 1931年10月, 118頁
- 43 赤井米吉「郷土教育の實踐としての「郷土化」を疑ふ」, 『教育・國語教育』, 厚生閣書店, 第1巻第8号, 1931年11月, 19頁

- 44 赤井米吉「郷土愛は國家愛になるか」、『郷土教育』, 郷土教育連盟, 第25巻, 1932年11月, 73-75頁
- 45 中野前掲『大正自由教育の研究』, 256-260頁
- 46 赤井米吉「郷土教育と新文化」、『郷土』, 郷土教育連盟, 第5号, 1931年3月, 12頁, 赤井米吉『新しき教育計画のために』, 同前掲『愛と理性の教育』, 174, 236頁 (出版: 1932年)
- 47 中野光「自由教育運動指導者の戦争体制への対応—赤井米吉を中心として」, 柳久雄・川合章編『現代日本の教育思想 戦前編』, 黎明書房, 1962年, 255頁
- 48 赤井前掲「郷土愛は國家愛になるか」, 78頁
- 49 赤井前掲「郷土教育と新文化」, 11-12頁, 赤井前掲「郷土愛は國家愛になるか」, 73-78頁, 赤井前掲『新しき教育計画のために』, 167-238頁
- 50 赤井米吉「自學自習主義の本義を説いて丹澤氏に酬ゆ」、『教育論叢』, 文教書院, 第34巻第6号, 1935年12月, 27頁。個人主義教育に関してはすでに1932年に「葬らねばならぬ」と批判している (同前掲『新しき教育計画のために』, 217頁)。
- 51 下中彌三郎『皇國教學の大本—維新教學の由來と我國独自の憲法政治』, 國策産業協會, 1937年, 20-21頁
- 52 赤井米吉『新世界觀と教育』, 日本文化研究会, 1941年, 81-82頁。赤井が下中の生命國家論を紹介し, 自身が依拠していることを告白した『新世界觀と教育』こそ, 彼の戦後の教職追放の根拠となった書籍である (中野光「教育者としての赤井米吉」, 赤井前掲『愛と理性の教育』, 440頁, 学園史編集委員会編前掲書, 75頁)。
- 53 赤井前掲『新世界觀と教育』, 8頁
- 54 同書, 33頁
- 55 赤井米吉「長期建設に於ける教育の課題」、『帝國教育』, 帝國教育會, 第722号, 1938年12月, 44頁
- 56 同論文, 44頁
- 57 同論文, 45-46頁
- 58 赤井前掲『新世界觀と教育』, 141, 143, 146頁
- 59 同書, 88頁
- 60 赤井米吉「時局と教育—師範教育の検討」、『教育研究』, 初等教育研究會, 第476号, 1938年1月, 同前掲「長期建設に於ける教育の課題」, 同「長期建設と指導者教育」, 『教育研究』, 初等教育研究會, 第492号, 1939年1月など
- 61 赤井米吉「嵐の中の宗教々育」, 『教育研究』, 初等教育研究會, 第361号, 1930年8月, 43頁
- 62 同論文, 44頁
- 63 伊東前掲論文, 398頁, 下中彌三郎『すめらみこと信仰—萬教歸一の最高具體標識』, 國策産業協會, 1937年, 12頁
- 64 赤井前掲『新しい教育計画のために』, 238頁
- 65 同書, 231-238頁
- 66 赤井米吉「今日の教育と兒童の自發活動」, 『教育・國語教育』, 厚生閣書店, 第8巻第5号, 1938年5月, 28頁
- 67 赤井前掲『新世界觀と教育』, 84頁
- 68 同書, 69頁
- 69 赤井米吉「國民學校と母親心得—皇國の道の教育」, 『婦人俱樂部』, 講談社, 第21巻第1号, 1941年1月, 225-226頁
- 70 志垣寛『ソウエートロシア新教育行』, 平凡社, 1926年, 1-5頁 (序)。おそらくは志垣は当時まだソビエト教育学の可能性も捨てきれず, 摸索の段階だったのであろう。このときトルストイの墓に参り, 遺族と懇談までしている (中野前掲「反逆と遍歴の同志 (志垣寛・桜井祐男)」, 157頁)。のちにマルキシズムとは訣別する。例えば1936年の次の一節。「唯物主義が行き詰まることは人間が靈をもつてゐることからだけでも分かることだ。人間が靈的存在である以上どうしても唯物萬能主義は成り立たない。… (中

- 略) …潜在意識の研究だとか生命主義の教育だとか、教育界にもさうした要求が起こつてくるわけである」(志垣寛「宗教評論を巡る」、『帝國教育』、帝國教育會、第689号、1936年3月、66頁)。
- 71 中野前掲「反逆と遍歴の同志〈志垣寛・桜井祐男〉」、126-160頁、尾崎秀樹『平凡社百年史：1914-1973【別巻】 下中彌三郎と平凡社の歩み』、平凡社、2015年
- 72 志垣前掲『生命至上の教育』、同「教育原理としての生命」、『小學校：初等教育研究雑誌』、教育學術研究會、第35卷7号、1923年7月、490-493頁、同「生命の個性に徹せよ—いかに生くべきかについて」、『教育の世紀』、教育の世紀社、第2卷第2号、1924年2月、32-42頁
- 73 注8に同じ
- 74 「〈教育の世紀社 月例夜話會〉教育の意義について」、『教育の世紀』、教育の世紀社、創刊号、1923年10月、133頁
- 75 志垣寛『教育界の新人舊人』、教育研究會、1927年、37-38、190頁(初出：『教育の世紀』、1925年9月(三笠奈良夫「教育界の新人物」))
- 76 志垣寛「個の發見とその教育」、『小學校：初等教育研究雑誌』、教育學術研究會、第34卷第13号、1923年3月、63頁、同『新學校の實際と其の根據』、東洋圖書、1925年、15-16、132頁
- 77 志垣寛『新興藝術と新教育』、教育の世紀社、1924年、322-323頁
- 78 同書、269頁
- 79 同書、323-324頁、志垣前掲『新學校の實際と其の根據』、133-134頁
- 80 志垣前掲『生命至上の教育』、55-56頁、同前掲『新學校の實際と其の根據』、134-135頁
- 81 志垣前掲『新學校の實際と其の根據』、135頁
- 82 「〈月例夜話〉宗教教育について」、『教育の世紀』、教育の世紀社、第5卷第5号、1927年5月、65頁
- 83 Bergson, H., *L'évolution créatrice*, Presses Unibersitaires de France, 1941, P.27,54 (PUF, QUADRIGE) (『新訳 ベルクソン全集 4 創造的進化』竹内信夫訳、白水社、2013年、45、74頁)
- 84 注75に同じ
- 85 志垣前掲『生命至上の教育』、260頁
- 86 志垣前掲『新興藝術と新教育』、312頁
- 87 同書、309-313頁
- 88 同書、312-317頁
- 89 志垣寛『教育教授の没落』、厚生閣、1925年、99頁、同「教育の理想と教育の事實」、『教育の世紀』、教育の世紀社、第4卷第8号、1926年8月、9頁
- 90 志垣前掲『教育教授の没落』、105頁
- 91 志垣前掲『新興藝術と新教育』、315-317頁
- 92 志垣前掲『教育太平記—教育興亡五十年史』、同「世界維新教育協會」、下中彌三郎伝刊行會編『下中彌三郎事典』、平凡社、1965年、192-193頁、碓井岑夫「志垣寛」、民間教育史料研究会・大田堯・中内敏夫編前掲『民間教育史研究事典』、369頁
- 93 志垣寛「農村の貧窮と教員の生活」、『教育時論』、開發社、1591号、1929年8月、6頁
- 94 同論文、7-8頁
- 95 志垣寛「農村教育の根本問題—都市と農村との關係について」、『教育の世紀』、教育の世紀社、第5卷第2号、1927年2月、15頁
- 96 志垣寛「生産學校の提唱—農村問題と教育者」、『教育時論』、開發社、1694号、1932年7月、10頁
- 97 志垣寛「コムプレックスシステム(ソウエートロシア新教育の實際)」、『小學校：初等教育研究雑誌』、教育學術研究會、第48卷第4号、1930年1月、5頁、同「巢立つ國民學校への要望」、『政界往來=political journal』、政界往來社、第12卷第4号、1941年4月、208頁
- 98 志垣寛「教育無風帶の解剖」、『教育・國語教育』、厚生閣書店、第5卷第9号、1935年9月、104頁
- 99 志垣寛「農村工業化と郷土教育」、『郷土教育』、郷土教育連盟、第43号、1934年5月、24頁

- 100 なお、志垣は郷土教育の範を「ゲマインシャフト」に求めている。「郷土生活は協力生活である。今頃流行のゲマイン・シャフトであるべきだ。それが利益社会となつて了はうとするのに反対したいのが吾々の郷土教育なのだ。郷土教育をゲマインシャフトにせよ」(志垣寛「郷土教育の見地から現行讀本教材を見る」、『教育・國語教育』, 厚生閣書店, 第2巻第2号, 1932年2月, 40頁)。ゲマインシャフトについては後述の野村芳兵衛の国家論分析において改めて触れる。
- 101 志垣寛「決戦教育態勢私案」, 『帝國教育』, 帝國教育會, 第783号, 1944年1月, 31頁
- 102 志垣寛『教育動員論』, 日本文化研究會, 1941年, 86-87頁
- 103 同書, 87-88頁
- 104 志垣寛『全國國民學校新建設參觀記』, 教育研究會, 1943年, 341頁
- 105 志垣前掲「巢立つ國民學校への要望」, 208頁
- 106 志垣前掲『教育動員論』, 70頁
- 107 野村芳兵衛『生活訓練と道德教育〈野村芳兵衛著作集 第3巻〉』, 黎明書房, 1973年, 3頁(小序)(出版: 1932年)
- 108 野村前掲『文化中心修身新教授法』, 71頁
- 109 野村芳兵衛「公民教育に就て」, 『教育の世紀』, 教育の世紀社, 第3巻第7号, 1925年7月, 20頁。「どうか私の學級經營が、如何に徹底してゐるかと言ふ見方でなく、神祕な生命の内に動く私と子供との生活の接觸相を味つていただきたい」(同「私の學級經營(一)」, 『教育の世紀』, 教育の世紀社, 第3巻第1号, 1925年1月, 181頁)。
- 110 野村前掲「公民教育に就て」, 同「生活が生むもの」, 同『生活教育論争〈野村芳兵衛著作集 第6巻〉』, 黎明書房, 1974年(初出: 『綴方生活』, 1930年4月), 同「文の技術と綴方指導案」, 『教育・國語教育』, 厚生閣書店, 第2巻第2号, 1932年2月, 同「新修身書の活用と生活の修身」, 厚生閣編集部編『最近思潮修身教育實踐の進歩〈教育新思潮叢書 第三〉』, 厚生閣, 1935年, 同『新文学精神と綴方教育〈野村芳兵衛著作集 第5巻〉』, 黎明書房, 1974年(出版: 1936年), 同「動くものを貫く生活教育—小川氏の「生活は労働なり」を駁す」, 同前掲『生活教育論争〈野村芳兵衛著作集 第6巻〉』(初出: 『生活学校』, 1936年1月) など
- 111 野村芳兵衛『新教育に於ける學級經營』, 聚芳閣出版, 1926年, 2-3頁(小序), 6-7頁
- 112 藤田宏達『浄土三部經の研究』, 岩波書店, 2007年, 235-238頁
- 113 野村前掲『文化中心修身新教授法』, 78頁, 同前掲『新教育に於ける學級經營』, 6頁
- 114 野村前掲『文化中心修身新教授法』, 78頁, 同前掲『新教育に於ける學級經營』, 2-3頁(小序)
- 115 「ここに愚禿釈の親鸞, 諸仏如来の真説に信順して, 論家・釈家の宗義を披閱す」(『教行信証』, 『親鸞全集 第一巻』, 春秋社, 2010年, 119頁)。
- 116 野村前掲『新教育に於ける學級經營』, 30-31頁
- 117 野村前掲『新教育に於ける學級經營』, 3頁(小序)
- 118 野村芳兵衛「舊教育を埋葬する日の私—協力意志に立つ教育とその實現(1)」, 『教育の世紀』, 教育の世紀社, 第4巻第10号, 1926年10月, 19頁
- 119 野村芳兵衛『私の歩んだ教育の道〈野村芳兵衛著作集 第8巻〉』, 黎明書房, 1973年, 15-16, 58-59頁
- 120 野村前掲『文化中心修身新教授法』, 1-2頁(巻末)
- 121 「尊号真像銘文」, 『親鸞全集 第三巻』, 春秋社, 2010年, 194頁
- 122 富澤前掲書, 50-53頁, 野村前掲『私の歩んだ教育の道〈野村芳兵衛著作集 第8巻〉』, 142-222頁
- 123 野村前掲『文化中心修身新教授法』, 同前掲「公民教育に就て」など
- 124 野村前掲『新文学精神と綴方教育〈野村芳兵衛著作集 第5巻〉』, 181頁
- 125 野村芳兵衛『生活学校と学習統制〈野村芳兵衛著作集 第4巻〉』, 黎明書房, 1974年, 18-21頁(出版: 1933年)
- 126 中内前掲『生活綴方成立史研究』, 947頁
- 127 野村前掲『生活学校と学習統制〈野村芳兵衛著作集 第4巻〉』, 18-19頁
- 128 西村絢子「解説」, 野村前掲『生活学校と学習統制〈野村芳兵衛著作集 第4巻〉』, 411-412頁

- 129 野村前掲『私の歩んだ教育の道〈野村芳兵衛著作集 第8巻〉』, 133-138頁
- 130 野村前掲「新修身書の活用と生活の修身」, 291頁
- 131 野村芳兵衛『家庭の教室』, 扶桑閣, 1943年, 6頁
- 132 野村芳兵衛『尋六の學級經營』, 厚生閣, 1935年, 4, 9頁, 野村芳兵衛「生活学校とは?」, 野村前掲『生活教育論争〈野村芳兵衛著作集 第6巻〉』, 325, 328頁(初出:『生活学校』, 1935年4月・5月)
- 133 海後宗臣編『日本教科書体系 近代編 第三巻 修身(三)』, 講談社, 1964年, 217-358頁
- 134 下中弥三郎の場合, 菊池の演説の直後, 早くも3月7日には「生命的な国体」を掲げて天皇機関説を批判する論文を世に問うている。生命国家論は国家法人説で「機関」とされた天皇の位置づけを批判しえた国家論であり, 以後戦時下日本の公式イデオロギーとしての地位を確立していくこととなる。その点, 天皇機関説事件は生命国家論にとっての一つの画期たり得たと言える。(『美濃部學説検討』座談會, 『維新』, 維新社, 第2巻第4号, 1935年4月, 19-21頁, 伊東前掲論文, 397-399頁)。
- 135 野村前掲「新修身書の活用と生活の修身」, 298頁。他にも同前掲「生活学校とは?」, 324頁, 同「綴方教育実践の核心を洗ふ」, 木下龍二編『現代綴方教育実践の中心問題〈綴方教育実践叢書 第8〉』, 東宛書房, 1935年, 115頁など。
- 136 Tönnies, F., *Gemeinschaft und Gesellschaft ; Grundbegriffe der reinen Soziologie*, Darmstadt : Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1963, S.3 (テンニエス『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト—純粹社会学の基本概念(上)』杉之原寿一訳, 岩波書店, 1957年, 34頁)
- 137 高山岩男「生の哲學の立場について」, 『理想』, 理想社, 第51号, 1934年11月, 19頁
- 138 野村前掲『新教育に於ける學級經營』, 6頁
- 139 野村前掲『尋六の學級經營』, 6頁, 野村前掲「生活学校とは?」, 326頁
- 140 野村前掲『新文学精神と綴方教育〈野村芳兵衛著作集 第5巻〉』, 79頁
- 141 野村前掲「新修身書の活用と生活の修身」, 292頁
- 142 野村芳兵衛「生活知性の貧困と生活教育—生活学校の諸問題(12)」, 野村前掲『生活教育論争〈野村芳兵衛著作集 第6巻〉』, 317頁(初出:『生活学校』, 1936年8月)
- 143 野村前掲『家庭の教室』, 60-61頁
- 144 新野和暢『皇道仏教と大陸布教—十五年戦争期の宗教と国家』, 社会評論社, 2014年, 中島岳志『親鸞と日本主義』, 新潮社, 2017年

## The Vitalism of the member of *Kyouiku-no-seikisha*

Junshin ITO

### Key Words

Akai Yonekichi, Shigaki Hiroshi, Nomura Yoshibe, Vitalism, New Education Movement, Life-state

### Abstract

This paper focuses on Akai Yonekichi (1887-1974), Shigaki Hiroshi (1889-1965), and Nomura Yoshibe (1896-1986), educational theorists who were active in *Kyouiku-no-seikisha*, and examines their discourses of life.

While previous studies have accumulated a certain amount of research on the Taisho period, little has been known about the early Showa period. In this paper, we focus on the "life" philosophy of Akai, Shigaki, and Nomura, questioning its origin and examining their thoughts from the Taisho to the early Showa periods.

The analysis revealed that Akai, Shigaki, and Nomura were inspired by R. W. Emerson, H. Bergson, and Shinran, respectively, to construct their own "life" ideology and preach an individualistic and liberal theory of education in the Taisho period. In their view, "life" was a symbol of educational ideals and signified anti-modern, anti-Western civilization.

However, their concept of "life" changed in the early Showa period with the experience of the crisis of the Depression around 1930. In their view, "life" was transformed into something that manifested itself in the real world as a "Life-state" centering on the emperor. Their theory of Life-state was a theory of the nation that rejected the principles of the modern nation-state, such as the rule of law and parliamentarism, and regarded totalitarianism as the principle of Japan. Thus, their educational theory became nationalistic and totalitarian, supporting and inspiring the construction of a Life-state.

When "life," which should be respected, becomes identified with the nation state, Life-state regards individual life as a "cell" and exerts its power of life and death.



